



多良間島の「村抱護」(写真提供:多良間村)
写真の中央手前から右奥にかけてカーブ状に伸びる植林帯が「村抱護」

抱護とつとむに生きる島

琉球王朝の林政と風水が息づく多良間島の暮らし

はじめに

沖縄では、琉球王朝時代に、たびたび襲来する台風などの厳しい自然環境に適応するため、シマ社会の人々は独自の風水思想に基づいた集落景観を築いてきました。これらの集落景観の大きな特徴の一つが、「抱護」と呼ばれる複層的な防風林帯です。具体的には、家屋の四方を囲む「屋敷抱護」、集落全体を囲む「村抱護」、海岸沿いに配置された「浜抱護」、さらには複数の集落を包含する「間切(現在の市町村)抱護」が琉球列島各地に存在していました。屋敷林としてのフクギ林は、沖縄本島北部の備瀬・今帰仁村今泊や、離島の波照間島など一部の地域において、今なお見ることが出来ます。

しかしながら、第二次世界大戦中の被害や、戦後の開発事業によって、これらの風水(防風)林の多くは失われてしまいました。そのような中で、現在もまとまった形で残っているのが、多良間島の「村抱護」(現地の方言では「ボーク」)です。多良間島の「抱護」は、琉球王朝の林業政策を今に伝える貴重な樹林帯であり、同時代の林業政策をとりまとめて刊行された書物「林政八書」とあわせて林業遺産に認定されました。



多良間島(写真提供:多良間村) 平坦な島の北側に集落が広がる

琉球風水

風水は、古代中国で生まれた自然と人の暮らしを調和させる知恵です。その基本は「蔵風得水(風を防ぎ、水を得ること)」にあります。自然は「気」という目に見えないエネルギーが流れる生命体と考えられてきました。晋代(西暦265-420年)の学者・郭璞は、「葬書」で「気は風に乘れば散り、水に境されれば止まる。古人はこれを

琉球大学農学部
陳碧霞

集めて散らさず、流しては止めるようにした。ゆえにこれを風水と呼ぶのである」と説明しており、この記述は風水の古典的な定義とされています。

風水は14世紀末頃、福建省から渡来した移民(久米三十六姓)とともに沖縄へ伝わったといわれます。18世紀には蔡温(1682-1761)が国都や集落、墓地の造成、山林管理などに広く応用しました。琉球風水の重要な考え方に「抱護」があり、集落や屋敷を囲んで守る地形や植林を指します。「浜抱護」「村抱護」「屋敷抱護」などの形態があり、複層的な防風林は沖縄の厳しい自然環境から生み出された知恵です。

『林政八書』と「抱護」

このような「抱護」の思想は、『林政八書』に体系的に記録されています。『林政八書』は、首里王府の三司官であった蔡温が公布した7つの森林に関する法令と、明治2年(1869年)

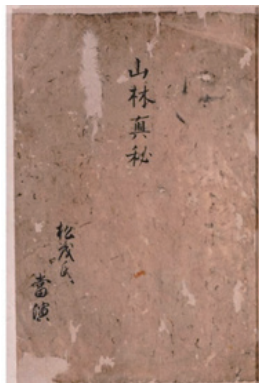
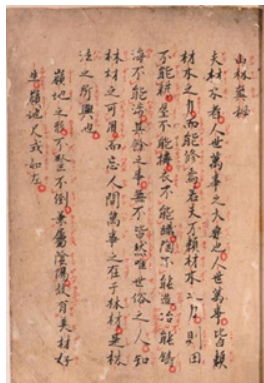


蔡温の肖像

に示達された森林関係の訓令をまとめたものです。内容は森林の重要性を説き、その育成や保護管理について記されています。所収されているのは、『**山山法式帳**』『**山奉行規模帳**』『**山山法式仕次**』『**樹木播植方法**』『**就山山総計条々**』『**山奉行所規模帳仕次**』『**山奉行所公事帳**』『**御差図控**』の8冊です。

このうち、蔡温が編集した『**山山法式帳**』(1737年)の趣旨を漢文で詳しく解説した『**山林真秘**』は、筆写本のみが琉球大学附属図書館の宮良殿内文庫に保存されています。この楮紙筆写本は1768年のもので、中国の陰陽説、気脈、山斜面の傾斜度および周囲の山々との相対的な地形に基づき、造林の適地を論じています。

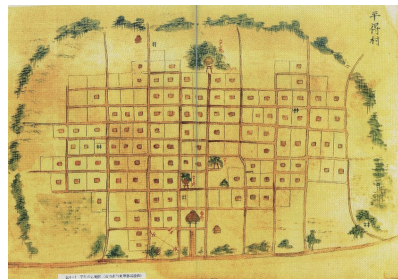
この『**山林真秘**』の中では「抱護」や「抱護の門」について詳しく説明しています。周囲を山々が囲んで保護している状態を「抱護」といい、山々が重なり合い、外へ流れていく出口を「抱護の門」と呼びます。そこは山林の気脈に関わる重要な場所ので、嶺地が抱護や対峙の形をもち、しかもその面積が広大であれば、最も優れた土地とされています。



『山林真秘・諸法式・伊勢故実』宮良殿内文庫MI049 (琉球大学附属図書館所蔵) <https://doi.org/10.24564/mi04901>

多良間島の「村抱護」(ポグ)

米軍が沖縄上陸する前の1942年(1943年に撮影された空中写真(現在は沖縄公文書館に所蔵)では、各集



石垣島南部平得村・真栄里村の手書き地図に見えるリュウキュウマツの「村抱護」(平得の古地図(石垣市市史編集室提供))

落を取り囲む「村抱護」が鮮明に見えます。石垣島南部にある平得・真栄里にもリュウキュウマツの「村抱護」が存在したことが古地図から読み取れます。しかし、第二次世界大戦中の被害や、戦後の開発事業によって、ほとんどの村抱護が取り壊されました。多良間島では、南側のカーブ状の植林帯「村抱護(ポグ)」が北側の丘へと続き、集落全体を取り囲んでいます。この防風林は地域住民によって守り継がれてきました。全長は約1.8kmにおよび、1741)



村抱護の植生



村抱護の外から見た風景

1742年頃に当時の宮古の頭職・白川氏恵通によって造成されたことが家譜資料に記されています。戦時中に多くが失われましたが、フクギ屋敷林は今も鮮明に確認できます。多良間島の「抱護」は、蔡温と琉球王朝の林業政策を今に伝える貴重な樹林帯です。



フクギ林の「屋敷抱護」

おわりに

人間と自然の共生に関する知恵は、いつの時代においても人類社会の持続可能性に欠かせません。沖縄の人々が、自らの住環境を観察し、自然を巧みに活用し、心を込めて育んできたフクギの屋敷林や「村抱護」は、人類共通の自然管理の知恵として評価され、林業遺産に登録されました。これからも、この貴重な遺産が確実に次世代へと受け継がれていくことを心より願います。